



創刊号

2014年
6月25日発行

創刊号に寄せて

阿部 好臣

昨年、桜麗祭に合わせてホーム・カミングデイが開催された。卒業生が母校へ帰る日の設定である。他の大学で、同窓会組織が強いところか、そのような催しに積極的なところでは、既に実績を重ねているところも多いと聞く。出てしまえばお仕舞いでは、あまりにも悲しい気もするし、青春時代のど真ん中の記憶は、それなりに貴重だし、愛しいものであるはずだろう。我が国文学科は、残念ながら、そのような思いに対する取り組みをする機会を持たずにいた。

学科の歴史を顧みると、四期に分けられるだろう。一九二五年に法文学部国文学科国文学専攻が設置されたのが第一期で、これがいわゆる旧制の時期である。この段階で、五百余の卒業生があった。それから一九四九年に新学制がスタートし、法文学部から独立し文学部国文学科となったのが第二期で、五五〇余の卒業生を数える。次が一九五八年に文理学部が創設されてからの時期にあたる。当時は二部制であった、これが一九六七年まで続いており、この間の卒業生六八〇余名である。そして、二部が廃止されて現在に至っているがこの間の卒業生二〇二二年度まで、は、約七千名を数えることが出来る。トータル

八千七百余となるが、この数には一九四八年にスタートした通信教育部の文学科国文学専攻は含まれていない。当然加えられるはずで、そうすると一万名を越える卒業生が巣立ったと考えられるのである。

膨大とも思える数なのである。多くの先輩・仲間・後輩たちの存在は頼もしいものでもある。しかし、視点を変えると、問題は数ではないとも思える。一人一人の思いは、数の中で薄まるものではない。キャンパスの中の一本の木。学科の記念に中庭に植えられた隠れ蓑の樹を、もう憶えている人は殆どいないだろうが、健在であるはずだ。もう無くなった二号館の図書館の前に今もある噴水、学部祭の時に飛び込んだのがいたことなど、すっかり移り変わりを見ていただろう。野球場が無くなり百周年記念館がでんと居座っているのも、もう自然な光景である。キャンパスは、相当に様変わりを見せている、学科の研究室も本館から研究棟（現二号館）へ、そして今は七号館の四階にある。かまぼこ型の体育館・大講堂・旧二号館も三号館も消えて、新しい三号館、さらに新しい建物の構想も実現に向けて動いている。

そんな様変わりの中にも、記憶の中の文理学部国文学科（全国でも「国文学科」の名を残すところも数少なくなった）は息付いているだろう。よく卒業生に「何かあったら、いつでも来いよ」と声をかけていたのを思い起こす。だが、その機会は中々見つけづらいのが実態でもあるだろう。ともかく、そのような場を作らなければと考え、その一端として、卒業生を始め国文学科に関わった人々の交流の場、情報伝達の間として、この「国文通信」を発刊することとした。趣旨が生かされることを切望する。記憶の国文にまたお帰り下さい。なお、提案から実行へは、国文学会が担った。併せて、入会（再入会）いただき学会の活性化にもご協力をいただければ望外の喜びである。

〔国文学会会長〕

OB・OGだより

研究会活動のこと

小杉 尚也

「平成」と改元された年に、縁あって日本大学職員として奉職してから、約四半世紀が経過していた。学生時代から実に三〇年近く、この文理学部キャンパスの移り変わりを見てきたことになる。

学生時代は、当時国文学科では盛んであった、研究会活動に参加していた。その頃は、確か「上代文学」「枕草子」「源氏物語」「和歌文学」「近世文学」「近代文学」「国語学」の七つの研究会があったと記憶している。私は「枕草子研究会」で会長もさせてもらった。活動は、先生方が顧問として付いていたこともあり、充実したものであった。他の研究会の先輩方や先生方と接する機会も多く、人間関係においても、いい体験をさせてもらったと思っている。

その後、各研究会の活動も衰退していったのは寂しい限りである。あの頃は各研究会単位でOB・OGとの関係も続いていた

し、他の研究会にいた同期との繋がりも深かった。当時、卒業時の謝恩会の幹事は、歴代の研究会会長に引き継がれていくのが通例であったこともその一端であろう。

職員となつてからは、司書の資格を取得して卒業したこともあり、幸運にも文理学部図書館事務課に配属されて、様々な経験もさせてもらった。図書館蔵書のデータベース化、業務のシステム化、そして新図書館建設に構想段階から関わるのが出来たのは、職務上大きな財産となった。二年前からは、教務課へ異動となり、また新たな職務に携わっている。

[平成元年国文学科卒業]

日々成長を目指して

黒田 陽香

私は今、茨城県つくば市で中学校教諭として働いています。「おはようございます」と元気な声で返ってくるあいさつ。授業や部活動で一生懸命な様子。心身ともに急成長中の生徒たちと一緒に、私も奮闘する毎日です。

自分の進路や仕事に関して悩まない人は

いないと思いますが、私自身悩むことばかりでした。大学4年生の時に教員採用試験を受けて不合格。卒業間近になつても仕事は見つからず、その後、中学校の講師にはなれませんが、採用試験にはなかなか受かりませんでした。やめようと思ったこともありましたが、五度目の挑戦で合格を果たし、現在の学校に勤めることになりました。

最初は、講師経験もあるから、と気楽に構えていましたが、配属先は開校二年目を迎えたばかりの児童生徒数一二〇〇名からなる小中一貫校でした。新設校ゆえに、学校行事はまだまだ手探り状態ですし、施設一体型の小中一貫校のモデルとして、新しい取り組みへの実践も求められています。今までの講師経験だけではどうにもならないことがたくさんあります。

毎年新しい生徒と出会い、共に過ごしていく日々。これからも失敗をしたり、悩んだりすることはあると思います。しかし、成長著しい生徒たちを前に、立ち止まっている暇はありません。少しでも生徒に寄り添えるように、少しでも何かを伝えることができるように、私自身も成長し続けていきたいと思っています。

[平成21年国文学科卒業]

私が私であること

佐藤 利恵

今から八年前、専業主婦だった私は、日本大学の通信教育部に入学しました。若い頃に抱いていた「文学」への憧れが膨らみはじめ、主婦業が一段落したことも手伝って、入学を決意したのです。

一番の思い出は地方スクーリングです。きらめく新緑の中の不来方城（盛岡市）では啄木の歌碑に出会い、芭蕉終焉の地の南御堂（大阪市）では辞世の句碑を見つめました。また、講義を通して、紫式部が唐の文学の影響を受けていたことも知り、また受講するたびに新しい世界が拡がり、まさに至福の時でした。そんな充実感に浸っていたのも束の間、その先には卒業論文という難題が待ち受けていました。

卒論のテーマを決める段階でとくに気になっていたのは、江戸時代の女流作家は、なぜ注目されないのか、ということでした。そこで選んだのが荒木田麗女です。対象は決まったものの、論文執筆に関しては初心者も同然、当初は時間だけがどんどん過ぎていきました。下書きを提出しても書き直しの連続です。しかし、その繰り返しの先

に書きたい物が見えてきました。後は夢でした。書き終えた時、やっと日大生になった気がしました。諸講義並びに論文作成を通して私が私であるようにと、導いて下さった先生方には感謝しています。

現在、私は放送大学に在籍し、修士論文を書いています。卒論を書き上げたあの時の達成感を再び味わいたいと思いつながらんばつていきます。

〔平成22年文学専攻(国文学)卒業〕

国文学科7年生

風間 綾乃

本を読まず、文章を書くことが苦手。そんな私が日本大学文理学部国文学科に入学し、卒業論文を書き上げ、さらには、今年の三月まで助手B（副手）として、計七年間をこの国文学科で過ごした。

小学校一年生から始め、現在も続けている書道。毎年着実に増える経験年数に反して、全く無い「書」に関する知識を得ようと、文学も大して分からないまま「書学」という未知の分野を目指したのがその始まりとなる。そして、晴れて書学ゼミ生となるも、

四年生に進むと、否が応でも二万字の文章作成に臨まなければならなかった。

書道がきっかけで国文学科の書学ゼミに辿り着いた私だが、その集大成となる研究テーマは「マンガの文字表現」についてであった。テーマ設定に際し、正統派である書道家や作品の研究と葛藤したが、先生の後押しもあり、建前ではなく本音を選んだ。実際、論じるということに苦悩するのには変わり無かったが、自分が本当に知りたいたいことを調べるのは楽しかったし、好きなことならここまで出来るのかと、自分の意外な行動力と執着心に驚いたりもした。

その後、助手Bを志した理由も同じく、簡単に言えば、やってみたいという楽観的なものである。それでも在職中の三年間には心が折れることもあったが、先生方や学生たちの何気ない一言に助けられてきた。

予想外に長居をしてしまったが、この場を借りて、この七年間、様々な形で支えてくださった全ての方々に感謝申し上げます。

〔平成23年国文学科卒業〕



談話室

サバティカルを終えて

荻野 綱男

平成25年度、私は1年間のサバティカルの機会を得ることができた。

この制度を知らない人もいるかもしれないので、少しだけ説明しておこう。サバティカルの期間は、授業をまったく行わずに、教授会や各種委員会などのさまざまな会議、入試関連の業務も全部免除される。行っているのは研究関連の仕事だけということになる。

今は、多くの大学でこういう制度が導入されるようになったが、昔は違っていた。国公立大学にはそもそもこのような制度がなかった。私は国公立大学に勤務する期間が長かったから、私立大学でこのような制度があることを知り、うらやましく思ったものだ。

そんなわけで、私にとって昨年度は人生初のサバティカルとなった。60歳を超えた時点で初めての経験である。もう一度サバ

ティカルを取得するということはない。

その期間に入る前は、あれもしたい、これもしたいと夢が大きく膨らんだ。中でも、本を2冊書きたいというのが一番の目標であった。今までの成果をまとめる意味があった。結果的にどうであったか。1冊しか書けなかった。年度の前半に集中的に執筆が進み、9月末には脱稿したのだが、それから2冊目に取りかかっても、今度ははかばかしく動けなかった。1冊目の著書は5月末の刊行予定で作業が進んでおり、まもなく多くの方にお目にかけることができると思う。

研究発表のほうも、春と秋の日本語学会の大会で行うことができ、新しい研究をすすめることも少しはできたように思う。これまでサバティカルの効果といえるのではないか。普段、考えていることがあつたりしても、なかなか研究発表などの形にまとめる時間がない。少し強制的にそういう方向に持っていかないと、まとまるものもまとまらない。

他にも、サバティカルによって身辺整理などができた面がある。自宅でも大学でも、机の上にはうずたかく積み上げられた書類(書類だけではないが)の山がだいぶ減ったよ

うに思う。積み残しが片付いた。これはある意味でサバティカル後の諸活動に対する「充電」のようなものだろう。

この1年間、研究中心の生活をしてみて感じたことがある。どうも、30代ないし40代のころの仕事量と同じようには行かないようである。自分の能力が衰えたとは考えたくない。実際、そういう実感はない。プライベートの面も含め、何かと忙しいのである。年齢が上がると、それにともなっているいろいろな「仕事」が舞い込んでくるものである。学会なども、他人の研究発表を聞きに行ったり、自分で発表したりという場であるよりは、運営していくべき対象になってきて、自分がそれに責任を持つ立場になりすぎる。

そんなことで、予定通りに研究を進めることはできなかったが、きちんと充電したとはいえそうである。平成26年度からはまた新しい気持ちで授業に臨むことができた。意外な発見ではあるが、授業で声を出していると、かなり疲れるようである。こんなことは今まで気がつかなかった。

意外で有意義なことがいろいろあった1年であった。

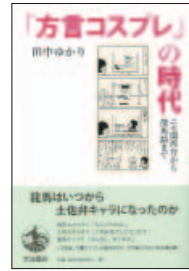
〔国文学科教員〕

もうひとつのあとがき

『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで』

(岩波書店 2011年 2,800円)

田中 ゆかり



「方言コスプレ」—なんだかヘンテコなふざけたネーミングだと思う方も少なくないだろう。土地と結びついた生活のことばである「方言」を冒瀆しているかのように感じる方もいるかもしれない。わたし自身も、拙著タイトルを『「方言コスプレ」の時代』で行くと、担当編集者から連絡を受けたときには、「これで行くのか！ ホントに行くのか！！」と膝ががくがくしたものである。このタイトルについては、広告がでるやいなや師匠筋に限らずお叱りも賜っているので、正直今でも膝はがくがくしっぱなしである。

しかし、この企画のふりだしである論文タイトルにもすでにこのキーワードは入っていたわけで、担当編集者にしてみれば、びびるわたしに、何を今更というところでもあっただろう（とはいいながら担当の膝もホントはがくがくしていたはずである）。

このキーワードの元の元をたどると、2007年3月に開催された社会言語学会研究大会シンポジウム「人の社会的属性」の取り扱いを問い直す」における自身の発題「着脱される「属性」」に行きつく。

関西人でもないのに「なんでやねん」とツッコミ、高知人でもないのに「行くぜよ！」と男気キャラで気持ちを奮い立たせる。「○○県人」ということをヨソモノにはわかりやすく、地元民同士ではその紐帯を明瞭化するために「素の方言」を編集・加工した「○○方言」で地元キャラを際立たせる。そのシンポにおいて初めて、そんなヴァーチャル方言を用い

たキャラ繰り出し行動を「方言コスプレ」と呼んでみたのだった。

刊行後は、さまざまなコメントを多方面より頂戴した。そんな中で、「方言コスプレ」という考え方を好意的に受けとめてくれたのは主として中年以下の女性であった。逆に、こんな行動自分にはしないし、都会の若者限定の一時的お遊びに過ぎないという拒否反応の主は、年配の男性が多かった。

が、事態はさらに新しく動く。2013年度前期に放送されたNHK連続テレビ小説『あまちゃん』の登場である。『あまちゃん』は朝ドラ初の方言コスプレドラマである。従来朝ドラにも生まれ育った土地の方言をしゃべる「方言ヒロイン」はいた。しかし、『あまちゃん』のヒロイン・天野アキは東京生まれの東京育ちにもかかわらず、祖母の住む架空の街・北三陸市袖ヶ浜の方言を話すのだ。この「ニセ方言ヒロイン」という朝ドラ初の挑戦的試みは、結果として国民に広く受け入れられた。「方言コスプレ」を具現化したかのようなこのヒロインの登場によって、「方言コスプレ」は、もはやほとんど説明不要になったのだ。

とはいえ、「方言コスプレ」を、研究の王道と捉える人はいないだろう。しかし、わたしにとってはもう乗ってしまった船である。こうなったらもう、行けるところまで行くつもりである。と、いうわけで、「方言コスプレ」の旅はまだまだ続く？

[国文学科教員]

ゼミ
だよい平成25年度
卒業パーティー

去る3月25日（火）、平成25年度卒業生が集う卒業パーティーが、西新宿のホテル・ハイアットリージェンシーにおいて開催された。例年、卒業パーティーは、各ゼミより選出の代表者が実行委員会を組織して開催される。したがって、進行や催し内容には、各年度の実行委員の顔ぶれが、色濃く反映される。さて「今回の卒パは、何色だったのか。」こうしたことを思いながら送り出すのも一興である。

（次号は、辻ゼミにスポットをあてます。）



文理学部ホームカミングデー

小平麻衣子

去年11月2日（土）、文理学部では第一回目のホームカミングデーが開催されました。多くの卒業生の方にご来校いただき、旧交を温め、また同日開催の桜麗祭を通じて、在校生の活躍をご覧いただきました。

第一回目の企画として、教員養成に歴史と実績のある文理学部にふさわしく、教育をテーマにした「学生講義」（桜麗祭企画）と「文理フォーラム」、そして全学科の「交流会（懇親会）」を行いました。「学生講義」では、教員を目指す学生が、目頃の成果発表として模擬授業を行い、会場の教員や先輩と議論を深めました。「文理フォーラム」は、若手教員と現役学生の意見交換の場です。学生からは、教職インターンシップの体験報告、若手教員からは、教育・学校現場での課題が提案され、それぞれの立場での不安や困難、課題が話し合われました。企画テーマは年ごとに工夫される予定ですが、このような有意義な先輩後輩の交流ができるのは、多くの卒業生のある文理学部ならではといえます。最後に交流会を、百周年記念館のニューアリーナで行いました。来場者は五〇〇人を超え、軽食をとりながら、芸達者な教員の司会による抽選会などで大いに盛り上がりました。

【国文学科教員】

1951年(昭和26年)

- 1月 3日 NHK、第1回紅白歌合戦を放送
- 1月 15日 日本大学国文学会機関誌『国学』を『語文』と改称し、その第一輯(通巻13輯)刊行
- 4月 5日 大学院修士課程設置(国文学専攻)
- 4月 11日 マッカサー元帥解任
- 4月 24日 桜木町で国電列車火災、106人が犠牲
- 6月 20日 第1次公職追放解除
- 6月 28日 林芙美子 47歳で急逝
- 7月 1日 日本大学国文学会総会(講演)一葉の蘭桜の初稿本について:塩田良平
- 7月 4日 第1回プロ野球オールスター戦
- 9月 1日 民間放送(中部日本放送)始まる
- 9月 8日 サンフランシスコ平和条約と日米安保条約調印
- 9月 10日 ベネチア映画祭で黒沢明監督「羅生門」が金獅子賞
- 10月 24日 講和・安保をめぐる社会党が分裂
- 10月 25日 民間航空再開、1番機が羽田発
- 10月 26日 日本大学国文学会主催講演会(講演)光源氏をめぐる女性:山田孝雄
- 11月 9日 文学部研究発表

NHKが第一回紅白歌合戦を放送し、も始まりました。ベネチア国際映画祭では、「羅生門」が金獅子賞(グランプリ)を受賞し、世界にクロサワの名を知らしめました。



10月26日、講演中の山田孝雄先生

た。学内では一九四九(昭和二四)年に法文学部国文学科が独立して文学部となり、国文学専攻が国文学科と改まりました。二年後のこの年、国文学会機関誌『国学』も『語文』と改称され、その第一号が刊行されました。また、大学院の修士課程(国文学専攻)が設置されたのも、この年のことでした。

【国内外の動き】この年、太平洋戦争終結のためサンフランシスコで平和条約が調印されました。終戦処理の色濃く残る時期でしたが、国内では日本航空「もく星」が羽田を飛び立ち、民間航空再開第一号として国内定期路線に就航しました。



「羅生門」の一場面

国文学科ヒストリー①

【一九五二(昭和26)年】大戦により実質的な休業を強いられてきた大学教育は、戦後、新しい政治体制のもとに学制変革がありまし

キャンパス点描

キャンパス周辺一帯、新年度を迎える時期になると、桜の花が見事に咲き誇る。この見事な桜とともに新入生の初々しい顔ぶれも眩しい。桜の花が散り、やがて新入生が大学生活に慣れる頃、木々にはみずみずしい若葉が見られる。



百周年記念館前の桜風景

掲 示 板

本誌「国文通信」の題字について

空海筆とされる『灌頂歴名』（国宝・神護寺蔵）中より集字したものです。文字の大小や角度を調整し、タイトルロゴとしました。

国文学会—学会費値下げ

今年度から年会費は3000円です。去年7月の総会（大会）にて決定しました。

学会費

一般会員（別に学生会員あり）の年会費は3,000円で、学会誌『語文』を年3回お届けします。

本誌『国文通信』は、年2回（6月、12月）の発行で、購読費は先の年会費に含まれています。なお『国文通信』の送付だけを希望される卒業生の方のために、会報会員の制度もあります。

『国文通信』のみの購読料は2年分（4冊）1,000円です。1年分（2冊）500円相当ですが、2年単位でお申し込みください。

国文学会大会

今年度の開催は7月5日（土）。詳細は学科のホームページをご覧ください。

第4回 芸能講座

「江戸のクロスオーバーミュージック—長唄と三味線の魅力—」。7月26日（土）14時40分開演。文理学部図書館3Fオーバルホールにて一般公開。無料。

学会費などのお支払い方法

郵便振替口座をご利用ください。

00180-3-11183 日本大学国文学会

振込用紙の通信欄に下記①②のいずれかを記し、①の場合は対象年度を、②の場合は購読開始の号数か年度を付記してください。なお、新規に入会または購読を希望される方は卒業年次もお書き添えください。

①学会費 3,000円

②国文通信購読料 1,000円

振込手数料はご負担をお願いします。なお、学生会員の方には、例年5月末頃に大会のお知らせとともに学会費納入のご案内状を差し上げています。

原稿募集

本誌は皆様からの投稿を随時受け付けています。詳細は国文通信編集委員会までお問い合わせください。文理学部国文学科のホームページ「お問い合わせ」（画面右上）から編集委員会宛にメールを送ることができます。感想などもお寄せください。

編集後記

筆者の方々に厚く御礼を申しあげたい。

発行に弾みがついたのはホームカミングデーの開催だった。学科として卒業生名簿すら満足に備えていなかったで、行事への参加呼びかけにも難儀する始末だった。結局、常日頃のお付き合いがいかに大事かということに尽きる。会報が卒業生との関係維持に役立つかもしれない。そんな思いから急遽編集委員会を結成し、準備にとりかかった。組織としては国文学会の傘下にあるが、当面の方法である。この小冊子が、学科と卒業生とを結ぶ架け橋のような存在になることを願う。誌面作りでは、文成印刷の宮下広さん、坂上谷径子さんのお手を煩わせた。

なお、学会の役員改選時には正式な編集委員会が発足するはず。それまでは左記の臨時委員が担当する。よろしく願います。（義）

国文通信編集委員会

阿部好臣・鈴木晴彦・竹下義人

創刊号

2014年
6月25日発行

〒156-8550
東京都世田谷区桜上水3・25・40
日本大学理学部国文学科
国文通信編集委員会

待望の会報を送り出すことができました。玉稿をお寄せくださった執